時評

個人情報と短歌

奥田亡羊

インターネットが普及してほぼ四半世紀。今や誰もが情報の発信者になり得るし、ネット通販で買い物もできる。リモートワークの導入で労働形態も変わった。人工知能が人間を凌駕するのではないかと騒がれている。グーテンベルクの活版印刷の発明以来の歴史的な変化のただ中に私たちはいる。

短歌もまた時代の波に曝されつつある。たとえばネット空間ではグローバルスタンダードである横書きが基本だ。フェイスブックやエックスに記載するときは短歌も否応なく横書きになる。個人情報保護の意識も広まり、対象の誰かれに関わらず、個人に深く踏み込む歌は詠みづらくなった。

・これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹

吉野秀雄の有名な一首。死期が迫る妻との性行為をうたっている。崇高な迫力に打たれるが、いまこの歌が発表されたら、妻の了解を得たのかと、そちらの方に気が向いてしまいそうだ。

・跛行して十数歩を来し子を胸に受けとめしときひとつこと畢る

これは島田修二の子どもの障がいをうたった秀歌。こういう作品も今は詠みにくい。認知症然り。自分の親であっても個人の病気や生活に関わる歌を本人の承諾なしに公表していいのかどうか。個人情報保護は既存の短歌と、かくも相性が悪いのである。

それに関連して、私は心の花の会員が近年出版した対照的な二つの歌集が気になっている。奥村知世『工場』と梅原ひろみ『開けば入る』だ。それぞれ大きな賞を受賞したり、候補作になったりして注目を集めた。いずれも働く女性の歌集で、女性の眼で男性社会の常識を問い直す点でも私は必読の二冊と思っている。ここでは個人情報に関係する歌のみを抄出したい。

・威圧感の低いフォントが選ばれて映されてゆく部長の訓示
・妻と子の家を実家と呼びながら単身赴任の課長が帰る
・作業着を脱いでスーツを着る朝の少しこわばる職長の顔
・年度末部下と面談するときの上座の自分にまだなじまない

奥村知世『工場』

・社会人のあり方をタムに説きながら漂ひてゐるわが十四年
・はじめての顧客招待ツアー終へ主催者フン氏の土産の多さ
・九歳のリエンの尻まで届く髪、工具屋ダン氏は朝なさな梳く
・苦しみもあらむか社会主義国に美しきゲイなるミス・リリの日々

梅原ひろみ『開けば入る』

奥村は会社や工場内での上司・部下など相対化された関係性の中で自他を捉える。人をうたうのに肩書を用いるのが特徴だ。一方、ベトナムで工具商社の現地責任者を勤めた梅原の歌は、異国という特殊な事情を生かして固有名詞で人をうたう。

個人に踏み込まない形でうたうか、あくまでも個人にこだわるか。どちらが優れている、どちらが新しいという問題ではない。道具や媒体が変われば表現も変わる。その変化を拒否する必要もない。ただ、インターネットに象徴されるグローバリズムに短歌を適応させてゆくのか、それとは対極に短歌を位置付けるのか、時代の中での立ち位置を明確にしておく必要はあるだろう。